

山口県公立大学法人評価委員会（第34回）の審議要旨

- 1 日 時 平成30年7月24日（火） 15:00～16:23
- 2 場 所 山口県立大学南キャンパスA館2階 大会議室
- 3 出席委員 辻委員長、岸本委員、首藤委員、広中委員（委員長以外50音順）
- 4 審議事項
 - (1) 第2期中期目標に係る法人の業務の実績に関する評価について
 - (2) 平成29年度に係る法人の業務の実績に関する評価について
- 5 審議要旨 [● 委員 ◆ 委員長 □ 法人 △事務局]

【教育】

● オープンキャンパスに参加する生徒の中には、どこの大学に進学するか迷っている生徒もいる。生徒の声をもっと拾い上げ、オープンキャンパスを充実させて、県大への進学意欲を高めていただきたい。

◆ 県大のオープンキャンパスの開催状況は？

△ 例年、夏の初めと夏の終わりの年2回開催している。28年度はそれぞれ1,016人、1,133人で合計2,149人。29年度はそれぞれ1,104人、1,398人で合計2,502人。30年度は夏の初めが、豪雨災害の影響を受けたこともあり、826人となっている。

● 今朝の新聞に県大生と美祿の協議会が新しいメニューを考えたという記事があり、それを見ながら良い面と悪い面があると思った。食をテーマにしたイベントはもっとコマーシャルしていけばいいと感じた。一方で、地域と連携して新しい食材や弁当を開発することは高校でも実施していて、それとどう違うのかが記事からは見えなかった。高校レベルとは違うもうひとつ高いレベルの取組が必要だと感じた。

また、推薦の見直しという話もあったので、全国大会でいい成績を収めた生徒がたくさんいるので、地域とのつながりも考慮して、是非県大に推薦等で選考していただければと思う。

△ 美祿の取組は、環境と密接に関連して色々な食材を活用していくということで、栄養学科と文化創造学科の相乗効果が生まれればと考えている。また、推薦については今後議論を深めていければと考えている。

- 高校との違いを挙げるなら、1点目は栄養食等の食能を含めた開発、2点目は、行っている高校もあるが、地産地消を活かした開発、3点目は毛利敬親展で供した明治維新をイメージしたデザートのような付加価値と専門性を加えた形の開発を行っている。ただ、委員からの指摘を受け、もっとアピールしなければと感じた。
- 今行っていることではなかなか差別化は難しいので、医療の研究レベルのバックグラウンドを栄養学科に取り込めるよう情報収集を行っているところである。それが結果として現れるには3年程度の期間が必要になるが、それが地産地消を含めた産業にどうつながっていくかを考えながら、方向性を示す必要があると思っている。おそらく来年度に方向性は少しお示しできるのではないかと考えている。
- ◆ 県大の学部構成は重複している所がなく、今の時代にフィットしている。ある意味で県内大学のトップランナーであり、これを伸ばしていただけたらと思う。
委員は、地域連携において、今の県大がどのように取り組んでいけばよいと思われるか。
- 今示されている方向性で間違っていない。超高齢化社会において介護などの職はすごく突き詰めるものがあるし、同時に地域の期待も大きい。さらに、少子化が進む中で地域をどれだけ大切にすることがひいては県内進学や県内定着につながってくると思う。
- 18歳人口が減少する中で、入試において特徴を出して多くの学生に受験していただくという方向性は大事だと考えている。農林業、ボランティア活動、スポーツ、文化なども評価対象にした入試を検討している。
- ◆ 多様な入試の形態を考えればいいと思う。県大には山口女子大学時代からの歴史性を持っているが、それをどう伸ばして発展していくか、社会の役に立つ方向に持っていくかが問われる。県大は地域に出ているような活動をしているので評価は高いのではないか。
- 4月から始まった第3期中期計画では「大地共創」を掲げ、地域に出向くだけでなく、地域と共に創るという関係を積極的に構築しようという方針に舵を切ったところである。
山口県の18歳人口が減少していく中で、選ばれる大学になるため、学力だけではなく、活動歴をいかに客観的に評価するかを学長プロジェクトとして取り組んでいる。また、教育改革担当の学長がアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーの全面的な改革に向けて検討中である。
- 山口県インターンシップ協会のサイトに山口県だけでも500近い企業が登録されている。これを活用されてみてはどうか。また、インターンシップに行きたくなるような動機付けをされてはどうか。
- 県大には1年生から3年生を対象とした2単位のインターンシップの授業があり、山口県インターンシップ協議会を通じて県内の企業に送り出している。2回行きたいという学

生にもプラスアルファの支援を行っている。行政へのインターンシップも始めたところである。

- ◆ 最近の学生は動かない、割と要求は高いが実社会を経験すると変わってくる。そういう意味でインターンシップは今の時代では大事である。

地域連携について、委員からこういうのがあればいいのではというのがあれば教えていただきたい。

- 学生をフィールドに出し、結果が出せるということを見越したプログラムで教員が学生を動かし、学生に成功体験を持たせることが必要。そのようなプログラムづくりに取り組んでいきたい。

- 県大にシンクタンクの役割は絶対必要だと思う。地域の課題解決を考えるときに県大がアイデアを出す。先ほどの美祢の話で言えば、学生の素晴らしいアイデアが地域にひとつの効果を与えるだけではなく、そこからこういうことをやっていこうとか、こうやって地域活性化をしていこうというヒントを与えることができれば、それはまさに地域との連携の結果だと考えるので、県大にはすごく期待している。

- シンクタンクは難しい。シンクタンクは内容が分かる者がリーダーシップをとって行う必要があり、教員も自分が持っているフィールドをシンクタンク化する必要がある。

- ◆ 大学は地域の中でシンクタンク機能を担うべきだと思う。医学領域はものすごく厳しい世界、県立大はどちらかというところまでではない。各学部学科が持っているものでコアを作って、行政機関や企業と連携して目標を決めてよいと思う。県立大ならではの要素があって、それを活かしながら、地域に入って行って貢献できるのが県立大の強み。国立大は全国にという「逃げ」ができるが、県立大は県にどれだけ貢献してきたかが問われる。それをさらに新しい時代のニーズに合った形のものを作り出す必要がある。県立大ができるシンクタンク機能をより強化して、各学科でディスカッションしていけば、ユニークなものができるのではないかな。

- 社会福祉学部の教員や学生が地域と連携して予防医学を実践すれば、山口県も長寿県になり、かつ、医療費も抑えられる可能性があるのではないかなと思う。

- 大地共創のプロジェクトとして、県政課題に対して県大としてどのような対応ができるか、また、過去10年ぐらいの県大の研究を振り返り、県大にどのような課題があるか、県や市町にどのような提言ができるか調べたいと考えている。今後、県大のシンクタンク機能の方向性を示したい。

- ◆ 2つの議題については修正するところはないと思うが、県大にやって欲しいこと、変えて欲しいことがあれば発言いただきたい。

- 中小企業は県大と商品開発等の研究に取り組めることをほとんど知らない。多くの中小企業が求めていることであり、周知していただきたい。
- ◆ 県大がコーディネートする形で新しい山口産の素材、農産物、水産物ができれば面白いと思う。
- 地域共生センターで取り組んでいるが、あまり知られていないようなので、周知を図っていききたい。

【 まとめ 】

- ◆ 評価書の原案については、素案のとおりする。
- △ 本日の委員の意見を踏まえて、委員長と事務局とで評価書原案を調製し、法人への意見照会を経て、評価書を確定させていただく。
評価の結果については、9月議会に報告させていただく。

以 上